

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目
氏 名講義型授業における学生の学びの分析手法の開発
—大学の授業を対象として—

須田 昂宏

論 文 内 容 の 要 旨

2008年度の学士課程におけるFD（Faculty Development：大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）の義務化（大学院課程では2007年度）に象徴されるように、現在、大学授業改善に注目が集まっている。

たとえば、授業の形態という点では、アクティブラーニングへの関心が高まっている。アクティブラーニングは書く・話す・発表するなどの活動への関与とそこで生じる認知プロセスの外化を伴うあらゆる能動的な学習のことであり（溝上、2014）、知識・情報・技術が急速に変化し高度な問題解決力や処理能力が求められる現代社会で必要とされる汎用的能力の育成を図るためにも今後もますます導入が進むものと考えられる。その一方で、アクティブラーニングの研究者の中でも「講義はなくなる」ということは言われている。たとえば、溝上（2014）は、アクティブラーニングが積極的に推進される場合でも、授業の中から講義パートが蔑ろにされることは考えられず、その講義パートにおいて、学生には、単に教員の話さばうと聴くのではなく、これまでの知識や経験と摺り合わせて、新しい知識を位置づけたり、思考したり、感動したり、疑問を覚えたりする、そのように聴く姿を求めたいと述べている。また、松下（2009；2015）は、講義とアクティブラーニング型授業は対立するものではなく、学習サイクル全体の中で、＜内化と外化＞、あるいは、＜知識の習得と知識を用いた高次の思考＞のどちらに重きを置いているかの違いであり相補的なものであって、講義に関しては、内的側面における能動性を引き出すような講義のあり方を追求することが必要になると述べている。総合的に見れば、アクティブラーニングの推進は重要であるが、同時に、「学生たちが内的に積極的・能動的に聴く講義はいかに実現できるか」ということも大学授業を考えていく上での重要なテーマである。

「学生たちが内的に積極的・能動的に聴く講義はいかに実現できるか」、この問いに

答える際にまず最も重要になってくるのは現状把握、つまり、現在の大学の授業の中で何が起きているのか、学生がどのように学んでいるのかを解明することである。特に講義型の授業における学生の学びはブラックボックスとして扱われるか、もしくは授業者が話したことをその通りに学生が理解すると考えられる傾向が強いが、もっと具体的にそこでの学びを明らかにしていく必要がある。

そこで本論文では、講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行う。小中学校における話し合いの授業のように学習者の発言が多く出現する授業に関してはその「発言」を手掛かりとした学びの分析研究が進められてきているが（日比・的場、1999；的場・柴田、2013；秋田・藤江、2010）、学習者の発言が少ない講義型授業を対象とした研究は蓄積が乏しく（吉崎・益子、2012；田口、2012）、「発言」とは異なる視角から学びを分析する手法を構築していく必要がある。具体的には、学生の「表出行動（話者凝視やうなずきなど、他者の行動に対するふとした反応（内面の表れ）として生じる行動）」と「リアクションペーパー（大学の授業において学生が授業に対する反応を記入したもの）」という2つの視角から学生の学びを分析する手法を開発した。

本論文は、第1章～第7章から成る。以下に各章の概要を記載する。

第1章では、まず、トロウ（1976）の言うユニバーサル段階を迎えた日本の高等教育において、大学の大衆化や学生の多様化に対応するために、個別大学の取り組みと高等教育政策の双方から、教育改善、授業改善のムーブメントが起きているという社会的背景を確認した。またそのような社会的背景の中、学術的には、①欧米の大学授業改善の研究書の翻訳・出版のための研究、②授業評価に関する研究、③学生の学力や気質に関する研究、④授業のノウハウの蓄積に関する研究、⑤授業研究・授業分析に関する研究、⑥授業形態論に関する研究が行われてきているが、総合的に見るとまだまだ量的にも質的にも研究が不足している状況であり、特に⑤授業研究・授業分析に関する研究はその方法論を含めてまだこれからの発展が必要な分野であることを指摘した。これから大学授業研究を発展させていくには、小学校や中学校の授業研究のように授業過程にまで踏み込んで授業における具体的な相互作用や学びそのものに注目した研究を行っていく必要があると判断し、本論文の目的を「講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行うこと」と規定した。

第2章では、講義型授業における学生の学びを分析するための手法の開発を行うにあたって、講義とは何か、講義において求められる学びとは何か、その学びをどう捉え分析するかを確認した。特に講義において求められる学びを本論文では「内的に積極的・能動的に聴く」こととし、「講義内容に興味をもち、その上で、既有知識や経験に関連づけたり、思考したり、疑問を覚えたりなどの知識の再構成を行いながら講義を聴く」こととして捉えられることを明らかにした。また、学びを捉

える方法として、①発言から学びを分析する方法、②記述物から学びを分析する方法、③自省報告から学びを分析する方法、④学習反応データから学びを分析する方法、⑤生理的計測データから学びを分析する方法、⑥表出行動から学びを分析する方法を体系的にレビューし、その結果として本論文では、「積極的に聴く」を分析するために表出行動を用いること、「能動的に聴く」を分析するためにリアクションペーパーを用いることにした。

第3章では、「積極的に聴く」を分析するために表出行動を用いるにあたり、表出行動とは何かを確認した上で、これまで授業における学習者の表出行動がどのように研究の中で扱われてきたかをレビューした。その結果、これまで教室という場所において学生（学習者）が表出する行動とその内的状況（内面）との関係に注目している研究は、研究群Ⅰ＝臨床的だが非実証的な研究、研究群Ⅱ＝実証的だが実験室的な研究、研究群Ⅲ＝実証的かつ臨床的な研究に分類することができるが、それぞれ順に、経験的・感覚的なものにとどまる、実験室的である、包括性がないといった問題点があることが明らかとなり、まずこれらを克服した上で表出行動と内的状況の関連を明らかにする研究を行う必要があること、さらにその知見を用いた大学授業過程分析を行う必要があることを述べた。

第4章では、第3章で述べたことに基づき講義型授業における学生の表出行動と内的状況の関連を明らかにする研究を行った。その結果として、第一に、授業者を見る量が多い学生ほど授業の理解度が高いこと（ただし学生の多くが学びに対して積極的な授業ではこの限りでない）、自発的なメモが多い学生は興味度が高い傾向にあるが理解度は必ずしも高いとは限らないこと、ほおづえは理解・興味のいずれとも高い相関はないこと、居眠りは理解度とは負の相関であるが興味度とは必ずしも相関があるわけではないことが明らかとなり、第二に、学生たちが学びに対して消極的である授業では学生は興味深い授業場面で授業者を見る量が増加する傾向があり、学生たちが学びに対して積極的である授業では学生は興味深い授業場面で微笑みや自発的なメモの量が増加する傾向があることが明らかとなった。またこれらの知見を用いて、学生たちが学びに対して消極的である授業1事例と積極的である授業1事例における教授法の特徴を分析した結果、前者では講義の各所に余談（授業の本題とは必ずしも関係がないがおもしろい話）を挿入するという形で学生たちにとって興味深い授業場面がつけられているのに対し、後者では学生たちと本時の話題との結びつけ、認知的切実性のある問いの提示、布石の使用、重要場面でのユーモアの使用など多様なムーブ（手法）によって授業全体を知的で興味深いものにしようとしていることが明らかとなった。

第5章では、「能動的に聴く」を分析するためにリアクションペーパーを用いるにあたり、リアクションペーパーとは何かを確認した上で、これまでリアクションペーパーの記述内容から学生の学びを捉えようとしている研究を網羅的にレビュー

一した。その結果、これまでリアクションペーパーの記述内容から学生の学びを捉えようとしている研究は【事実報告型＝記述内容をそのまま報告する研究】、【質的解釈型＝記述内容を解釈する研究】、【カテゴリー分析型＝記述内容をカテゴリーに分類する研究】に分類することができ、このうち【質的解釈型】の研究と【カテゴリー分析型】の研究は学生の学びをより深く捉えようとする研究であるが、それぞれ「分析のプロセスや根拠が決まっていなかったり見えなかったりするがゆえに高度な専門性が必要になる」、「学びの具体性を排除してしまったり学びの一側面しか捉えられなかったりする」という難点があることが明らかとなった。ゆえに、これらの難点を克服したリアクションペーパーの記述内容の分析手法が求められるということ述べた。

第6章では、第5章で述べたことに基づきリアクションペーパーの記述内容に基づく学生の学びの分析・可視化手法を開発した。可能な限り学びを具体的に捉えるという「学びの具体性の保持」と可能な限り手続きが決まっていって行いやすいという「分析手続きの定式化」を開発のための二大要件とし、それらを満たし得るものとして中道ら（2014）の「中間項」を参考とした。中道らの「中間項」は元のテキストデータを原文の具体性を保ちつつ構造化されたデータに変換するというものであるため、マルトン（2015）の学習の捉え方に依拠する形でリアクションペーパーの記述内容を構造化されたデータに変換し、クロス集計表に整理し、コレスポネンス分析とバブルチャートを適用することによって、「学生」と「学びの類型」の質的・量的な関連構造や「授業トピック」と「学びの類型」の質的・量的な関連構造を可視化することを可能にした。さらには、開発した可視化手法を用いて事例検討を行いことにより、学生自身にも既存の興味関心や知識があり、授業トピックにも「新奇性」、「不一致性」、「不明瞭性」などといった刺激が含まれていて両者の相互作用が起こるときに、【思考】を中心とした「能動的に聴く」授業が成立するという構造が明らかとなった。

第7章では、本論文で開発した手法を波頭（2004）の枠組みに沿って整理するとともに、今後の課題を述べた。